

# 播粉木

森岡 正作

## 小春日の

帰りに は 魚籠 い つ ぱ い の 茸 かな  
肩 凝 の 母 の 播 粉 木 と ろ ろ 汁  
空 耳 に 潮 騒 ひ び く 新 松 子  
投 網 で も あ ら ば と 思 ふ 椋 鳥 の 群 れ  
漱 石 の 墓 に 太 れ る 秋 の 蠅  
放 牧 の 牛 戻 り ゆ く 花 す す き  
柿 日 和 野 良 の 昼 餉 は 車 座 に

小春日和の日は、電話それも友人や親しい人にかける時は、外に出て庭の石などに腰掛けて話したくなる。そんな場合は当然ながら楽しい話題でなければなるまい。太陽の少し眩しいような明るさとその温かみが本当に有難いものと感じられてくる。ふと松本たかしの〈玉の如き小春日和を授かりし〉という句が浮かんだ。

そう言えば、登四郎先生に昭和五十六年、研三主宰の次女麻衣さんの誕生を喜び、〈小春日の産湯濁らせ撥ねて孫〉と詠んだ句がある。面白ことに先生とたかしの句を合わせてみると、麻衣さんがまん丸い小春日のように思えてくる。先生は敢えて「濁らせ」に、赤ちゃんの力強さを表現したのである。

小春日はまた心地よい眠気と夢想を招きやすい。夢想と言えば旅への誘い、一人無一物となつて流離つてみたくなる。やはり北の方であろうか。日本海の吹えるような風と荒波が身を引き絞る。そこまで想が膨らめば、もう小春日とのギャップは埋めきれないのである。